
幸せを運ぶ男の子

あいあむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せを運ぶ男の子

【Nコード】

N6047V

【作者名】

あいあむ

【あらすじ】

あの夜、私は不思議な男の子に出会った

。

僕は幸せを運んでいるんだ。

私が深夜に一人ぼつんと佇んでいた男の子が心配で、なにをしているのかと尋ねたとき、あの子はそう答えたはずだ。

そんなお伽噺のようなことを言ってみせた男の子の口調が年不相応に真剣だったのを、やけにはつきりと覚えている。

あどけない顔を凜と引き締めて、無垢な瞳に眩しくなるほどの使命感を燃やして。

どう考えても嘘にしか聞こえない言葉を疑う気になれなかったのは、きつとそのせいだ。

私はろくに回らない頭でその日の記憶を更に手繰り寄せる。

まだ足りない、まだ足りない、と、愛され、強く抱き締められても死んでしまううさが、より強い愛を求めるかのように。

そういえば、あの子は私にも幸せをあげるよとも言っていた。

そして、その時はわからなかったけれど、今思えば私は確かに幸せをもらったのだ。

その時から私は職場で上司からの覚えもいいし、彼氏だってできた。だから、私はきつと幸せをもらっていた。

でも、その時は実感が湧かなかったから、お礼も言わずにこう聞いたんだ。どうして幸せを運ぶなんてしているの、と。

彼の答えは簡潔だった。

僕の幸せは大きすぎるから、誰かにあげてもいいと思った、なんて答え。

それだけ言うと、彼は私の前から去っていった。

彼の顔を再びみるようになったのは、今日の朝だ。

私が布団の中で目覚ましにつけたニュースによれば、あの子は交通事故で死んだらしい。

名前は知らなかったけれど、顔写真が出てきたからすぐに気付い

た。

あの子は、幸せをあげると言っていた。それならば、幸せをあげすぎて、自分の幸せがなくなってしまったら、どうなってしまっんだろう。

すでに夏だというのに今朝は寒すぎて、私は布団の中で体を震わせてうずくまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6047v/>

幸せを運ぶ男の子

2011年10月8日10時58分発行